

2021年5月2日 主日礼拝説教要旨:使徒パウロの生涯(3)

使徒言行録7:54~8:3 「パウロの三恩人」

高井 卿 介

今朝はパウロに大きな影響を与えた、パウロの恩人とも言える、ステファノ、アナニア、バルナバの三人の人物を取り上げた話すことにする。

I. ステファノ(使徒7:54~8:3)

彼はエルサレム教会の七人の役員の一で、クリスチャンとして最初の殉教者であった。その彼の殉教に関わったのがサウロ後のパウロであった。しかも彼は迫害の首謀者として、その現場にいたのであった(使徒7:58)。

ステファノが死の間際に発した最期の言葉は、イエスの十字架上の最後と最初の言葉を思い出させるものであった。

一つは「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」(使徒7:59)で、これはイエスの十字架上の七番目の言葉(ルカ23:46)と、そっくりである。

もう一つの「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」(使徒7:60)は十字架上の最初の言葉(ルカ23:34)を思い出させるものであった。

アウグスティヌスはステファノの祈りが、サウロを回心に導いたであろうと言ったが、このステファノの言葉は生涯パウロの中に響いていたであろう。だからパウロは遺言の手紙であるテモテへの手紙二4:8で「今や、義の栄冠を受けるばかりです」と言った。

その「栄冠」のギリシャ語が「ステファノス」で、パウロは殉教を前にして自分が迫害したステファノの名を呼んだものと思われる。

II. アナニア(使徒9:10~19)

迫害者サウロがダマスコ途上で、復活昇天のキリストに出会って回心した時、彼は太陽よりも明るい光(使徒26:13)を見て、三日間盲目状態となった(使徒9:9)。

その時、神よりサウロの許に遣わされ、彼の上に手を置いて目が見える様に祈ったのが、ダマスコに住んでいたアナニアであった。彼が祈った時、サウロの目から「うるこのようなものが落ちた」(使徒9:18)。ここから「目からウロコ」という言葉が使われるようになったのである。

なお、アナニアはただサウロの目が明るくように祈っただけでなく、彼は異邦人やイスラエルの人々に主の御名を伝える、神から選ばれた器、即ち「使徒」であることを伝えたのである(使徒9:15)。

また、アナニアはサウロが神の為に働くのに欠かせない、「聖霊で満たされるように」(使徒9:17)祈る事も忘れなかった。

III. バルナバ(使徒9:26~31)

バルナバは「慰めの子」という意味であるが(使徒4:36)、その名の如く回心後のサウロがエルサレム教会のクリスチャンに理解されなかった時、サウロの事を正しく評価し、保証人として彼らに紹介の労を取った(使徒9:27)。

その後、バルナバは第一回伝道旅行でサウロと共にキプロスからガラテヤ地方に宣教をした。バルナバがいてパウロがあったと言っても良い程の、彼こそはパウロの最大の恩人と言えよう。パウロとバルナバとの関係については今後改めて説教する予定である。